# スワーミー・ヴィヴェーカーナンダ、

# ラビンドラナート・タゴールと日本

2012年5月27日

スワーミー・ヴィヴェーカーナンダ生誕祝賀会

スワーミー・メダサーナンダによる講話

於・インド大使館(東京)

在日インド大使館サンジャイ•パンダ首席公使閣下　および親愛なる友人の皆様、

インドのラーマ・クリシュナ・ミッションの支部である私たちの協会は、1995年以来、東京でのスワーミー•ヴィヴェーカーナンダ生誕記念日の公式の祝賀会を開催してきました。毎年、実行委員会を設けてテーマを決め、講演のためにあらゆる分野の方々を講演者としてお招きします。今年のテーマは、 「スワーミー・ヴィヴェーカーナンダ、ラビンドラナート・タゴールと日本」です。今年は、記念すべき重要な年であるため、このテーマが実行委員会により決定されました。なぜ重要かと申しますと、まず、今年は日印国交樹立60周年にあたり、また、タゴールの生誕150周年記念の祭典が終了し、来年からスワーミー•ヴィヴェーカーナンダの生誕150周年記念が開始されるからです。この両者とも日本を訪れ、日本と関わり、近代の日本とインドの交流のパイオニアであることから、今年はこのテーマに決定されました。

これから私の見解をお話しいたしますが、皆様は私に同意する必要はなく、私は皆様にとって何か参考になるものを提供できたら大変うれしく思います。本日は、ヴィヴェーカーナンダとラビンドラナート・タゴールが日本に与えた影響と、日本の彼ら対する影響について考察したことをお話します。日本の彼らの影響については、特に彼らの日本訪問の感想を主題にして今わかる範囲でお話します。

## ヴィヴェーカーナンダの日本への影響

ヴィヴェーカーナンダの日本への影響について語るとき、タゴールの知名度の規模が格段に大きいことを忘れてはなりません。なぜなら、タゴールは詩人であり、彼の文化的・芸術的な魅力は、宗教と一体化したスワーミージよりも、一般社会でより受け入れられやすいものです。またタゴールが日本を1916年に訪問したとき、すでに彼はアジア人として最初にノーベル文学賞を受賞した有名人でした。一方、ヴィヴェーカーナンダは、1893年に日本に到着したときは、同じ年の数ヶ月後の9月には、世界宗教会議での有名なスピーチでニュースとなりましたが、実質的には無名でした。このニュースは日本の新聞にも掲載され、私も実際にそのコピーを見たことがあります。ヴィヴェーカーナンダの日本再訪と演説の招待が、日本の最高地位にある明治天皇からも、きていましたが、もし彼が健康であったならばそれが実現したのか、またそうであっても日本の招待者や一般大衆にどのように受入れられたかは、推察する以外に仕方ありません。

スワーミージは、日本に無名の僧侶として訪問したときに、おそらく彼に接した人たちには何か印象を残したのではないかと思われます。そしてこの推察は、インドの著名な実業家ジャムシェドジー・タタのコメントによって実証されています。彼は日本に滞在した後、横浜港からバンクーバーまでの長い航海をスワーミージと共にしたのです。タタが後年、シスター・ニヴェディタに話したことによると、スワーミージにあった日本人は彼を日本人が拝んでいるブッダにたとえていたそうです。

しかし、スワーミージの日本への本格的な影響がみられたのは、フランスのノーベル文学賞作家、ロマン・ロランによる優れたヴィヴェーカーナンダの伝記が1931年に邦訳されてからです。その後、1958年と1964年のスワーミー・ヴィヴェーカーナンダ生誕100周年で、ラーマクリシュナ僧団の僧侶が来日講演を行い、特定の少数の人たちに限られてはいたものの、スワーミージへの関心が高まりました。これにより、大阪と東京に二つのヴェーダーンタ・グループが同時に発生しました。ヴィヴェーカーナンダの影響が本当に始まったのは、この二つのグループがスワーミージの本の出版を開始してからです。その後1984年に東京ヴェーダーンタ協会は、ラーマクリシュナ僧団の正式な組織となり、僧団本部から派遣された僧侶の指揮のもとに本格的な活動が開始され、ようやくスワーミージの最後の願い「日本のために何かをしたい」が実現されることとなりました。協会はこれまでラーマクリシュナ、ヴィヴェーカーナンダについて32冊の本を出版してきました。そのうち7冊がヴィヴェーカーナンダ関連ですが、なかには、常に需要があり、協会の書籍部やホームページだけでなく、丸善や紀伊國屋書店などの全国的に著名な書店でも販売されている本もあります。とはいえ、スワーミージについてはまだ多くの本の邦訳が待たれています。

逗子のヴェーダーンタ協会での恒例のスワーミーの生誕祭や、1995年から続いている本日のような東京での公式の祝典では、ヴィヴェーカーナンダについて講演が行われ、また大学や日本各地で、ヴェーダーンタ協会在住のスワーミーが講話を行っています。スワーミージの展示も、東京・代々木公園のナマステ・インディア、インド大使館の近代的な美しいギャラリー、大阪の大きな公会堂など数か所で開催されました。また協会からは、定期的にメルマガにて、ヴィヴェーカーナンダのような偉人からのインスピレーションに満ちたメッセージを発信しています。

さらに大勢の会員がいる日本ヨーガ療法学会のような団体がヴィヴェーカーナンダのヨーガ・シリーズ4巻を彼らのヨーガ研究に組み入れました。

このようなことで、ヴィヴェーカーナンダが身近に感じられるようになり、影響も大きくなりました。程度に格差はあるにせよ、今日、日本の社会の全分野で、多少なりともヴィヴェーカーナンダを知っている人は、数千人に及びます。ここで重要なことは、それがどんな影響を与えたか、ということです。

スワーミージのインドについてのメッセージは日本の皆様には参考にはならないと思いますが、精神性、人生設計、調和と普遍性などについては有益であり、世界中で高く評価されています。スワーミージについて読み、率直に彼の偉大さを称賛し、彼によっていかに励まされたかについて話す数多くの日本人に会いました。昨年ここで講演された上野理絵さんを思い出される方もいるでしょう。彼女は、どのようにスワーミージが友となり、哲学者として仕事と主婦業を両立させる彼女を導き、やがて小さな会社の社長となるまでを話されました。これは、一人だけの例ではありません。

スワーミージのゆっくりとした、しかも着実な影響の広がりには、ふえつつある人々の宗教への無関心という現実にもかかわらず、二つの要因があります。ひとつは彼のメッセージには強大な力と魅力があることです。もうひとつは、このメッセージを伝えるための組織が存在することです。

## スワーミージに与えた日本の影響

さて、日本がスワーミージに与えた影響ですが、彼は、日本人の特性の多くの部分に感銘を受けました。この国について最も感動したのは、イギリス帝国主義の支配下にあったアジアの一国のインドとは違って、日本は時代遅れの眠りから目覚め、鎖国をやめ、近代化を推し進め、国家として新しく歩み始めていたことです。これがまさにスワーミージがインドで実現したかったことなのです。またスワーミージが感心したのは、西洋を模倣し、多くの思想や機関など西洋から持ち込みながらも、日本は伝統的な習慣を捨てずにその多くを残していたことです。これも彼は、インドが見習うべき理想、と感じていました。

このことが理由で、初めての西洋訪問から帰国して、インドの復興を議論しながらも、彼は私的な会話や新聞などの取材で、アメリカやヨーロッパの例ではなく、アジアにある国家、日本を話題にしました。彼は、日本こそインドの復興のモデルだと考えていたのです。彼は、たびたび、インドの若者たちに日本や中国に行くように、特に日本行きを勧め、いかに偉大な国家に変えていったかを学べ、と助言していました。

スワーミージは鋭い観察眼と、深く歴史の知識を持っていたものの、彼の日本滞在はあまりにも短く、ほとんどが観光であり、近代化の全ての局面や、近代化が国家に及ぼした影響については、当時はあまり顕著でなかったこともあり、深く知ることができませんでした。

たとえば、急激に西洋を模範とした近代化を急いだため、国民の精神的生活が損なわれました。国家が国民の道徳と福祉のためにだけではなく、政治の中枢において軍部を強化するために神道を優遇したことで、何百年も共存していた神道と仏教の対立が生まれ、その結果、仏教が弱体化したからです。この過程で、鎖国の中世から、西洋のアジアへの帝国主義の攻撃に対抗できる強い近代国家をめざしていた日本は、まもなく近隣諸国への侵略を追求するようになり、植民地保有国となろうとしました。これは実に近代史における大きな皮肉のひとつです。

今述べた国家の発展は、スワーミージが訪問した1897年からタゴールの1916年の訪問の数年間の間に顕著となりました。

## タゴールが日本に与えた影響

タゴールはご存じのように、日本を訪問する前からノーベル文学賞を受賞した初めてのアジア人としてすでに有名でした。これは日本人に誇りと、アジアの国家としての意識を高めたいと願う国家に、誇り高い西洋諸国と対等である意識を与えました。タゴールの来日前には、彼の作品及び関連書が少なくとも7冊が出版されていました。本の出版そのものが、知識人のタゴールへの関心の高さの現れであり、また出版により、一般人にタゴールが知られるようになりました。

故に、タゴールの来日は歓迎され、著名な詩人、ノーベル文学賞受賞者として彼は、日本のあらゆる職業の人たちの心からの歓迎を受けました。そこで、彼は多く人々と知り合い、野口米次郎のような有力な詩人たちとは、互いに親しい友人、称賛者となりました。しかし、タゴールは人道主義者で反帝国主義者であったので、日本人に対してではなく、日本の帝国主義的政策に対して批判的でした。それは、東京大学での「インドから日本へのメッセージ」と題した講演や、慶応大学での講演「日本の魂」で表明されました。日本政府及び関係者は、かなり不快感を持ちました。その結果、「タゴール熱」や、訪問が期待された1915年に始まった熱狂的な「タゴール・ブーム」はたちまち冷めてしまいました。かつては野口のような称賛者たちも、無関心となるか、公然と彼の批判を始めるものもいました。

これにより、タゴールの日本への積極的な影響が阻まれたことは、明らかです。この状況は、タゴールの二度目の訪問でも同じでした。それは講演を依頼された個人的な招待による私的な訪問でした。これ以降のタゴールの訪問が与えた影響とは、一般的ではなく、より個人的な、私的なものでした。

第二次大戦による国家の破壊で、前政権の軍国主義が断念され、平和を宣言した新政権が誕生したときに、劇的な変化が起きました。人々の考え方にも、ものごとを新しく、積極的に、自由な視点でみる、という新しい環境が生まれました。タゴール生誕100周年記念は、このような背景に行われ、タゴールの人道主義、自由、平和も新しく評価されるようになりました。開催された多くの行事には、社会階層のあらゆる人々が熱意をもって参加しました。このときの特徴は、数多くのタゴールの作品が日本語に翻訳されたことです。最初は英語から訳されましたが、後にベンガル語からも訳されはじめ、最終的にはベンガル語からのみ邦訳が出されるようになり、一般に広くタゴールが理解され、人々に多大な影響を与えました。

この影響について詳しく知るには、二つの面からみるべきです。まずは、タゴールの作品のスタイルや内容が他の作家に影響を与えたかどうか、次に彼のメッセージが他者に影響を与えたかどうか、をみることです。

最初の点ですが、多くの日本の学者の見解によれば、日本の作家や作風には、タゴールはほとんど影響を与えなかったということです。しかし、ノーベル文学賞を受賞した川端康成は、異なった意見を持ち、中学生時代にタゴールをみた彼は、聖人のような風貌に深い感銘を受け、タゴールの考えを彼の作品に相当取り入れています。

タゴールが一般の日本の読者にどのような影響を与えたかを知るには適切な調査が行われて文書化されない限り難しいことです。しかし、タゴールの作品を1913年に初めて邦訳した増野三良の例はとてもわかりやすいものです。これは、タゴールの英訳版の「ギータンジャリ」からの翻訳でした。彼が後年、打ち明けたことによれば、当時は不治の病とされていた結核を患ったことを知ったときが、彼が初めてタゴールの作品を知った日でした。そしてタゴールの作品が、おそらく「ギータンジャリ」の詩が、長引いた闘病生活の彼の支えとなり、末期的な病を忘れることができたというのです。タゴールの作品をきっかけに、彼はインド哲学を学ぶようになります。

明確に知ることはできませんが、タゴールの作品を読む喜びに加えて、彼の作品に励まされ、信頼や霊感を得て、日常生活の問題や苦難から自らを支えている多くの人々がこれまでも数多くいたことを私は確信しています。同じことが、より小さい範囲ですが、タゴール・ソングの詩とメロディが日本人に理解され、楽しまれています。タゴールへの関心は、100周年が終わるとまた失われましたが、昨年の生誕150周年記念で、再び復活しました。しかし、100周年記念のときのような熱狂はありませんでした。

## 日本がタゴールに与えた影響

ヴィヴェーカーナンダと同様に、タゴールも日本人の特性に非常に感銘を受け、インド人に吸収してほしいと願っていました。言語の制約にもかかわらず、成熟した詩人であるタゴールは、シンプルで深く、想像的で無駄な言葉がない日本の俳句に深く魅せられました。彼自身、有名な俳句をベンガル語に翻訳しました。例えば、松尾芭蕉の有名な俳句「古池や蛙飛び込む水の音」を、タゴールは次のようにベンガル語にしました。

Prono pukar/ Banger laph/ Jaler shavda.

このような短い俳句に創作意欲をかきたてられたタゴールは、ベンガル語でも短い詩を作るようになりました。タゴールは、特に西洋ともインドの絵画とも異なる日本画の美しさに惹かれ、インドの訪問中にタゴールと親しくなった岡倉天心の友人の横山大観や 荒井寛方などの何人かの有名な日本の芸術家と交流しました。荒井寛方をカルカッタの自宅に招聘して、日本画をインドの美術家に教え、また彼はインド絵画を学びました。タゴールによって始められたインドと日本の文化交流は、やがてタゴールのヴィシュヴァ・バーラティ大学の「日本バーヴァン」つまり日本語及び日本文学・文化センターの設立に至りました。この大学や他のインドの研究機関で、現在、留学中の人も含めてインドの言語、文学、哲学、芸術、音楽とダンスを勉強した日本人の数は相当なものとなっています。

これまで、歴史的な相互の影響を話してきました。最後にとりあげたいことは、次の問いです。真剣に討論されるべき議題であるこれらの影響を強化する機会や方法はあるのでしょうか。

最初に、スワーミージとタゴールの両方が心に描いた、インドでの日本の影響を促進することについて話しましょう。ふたりとも、インド人は、たぐいまれな日本人の特性である勤勉さ、規律、調和、謙虚さ、愛国心を身につけるべきだ、と考えていました。スワーミージとタゴールの訪問以来、多くの浮き沈みを経た100年あまりの歳月にもかかわらず、日本人はいまでも、これらの大部分を維持しており、これらは現在のインド人にとって非常に適切なことばかりです。

第二に、スワーミージは、日本の助けを借りて、インドの物質的繁栄を図ること有効だ、と考え、彼はインド人に対して日本から技術を習得することを勧めましたが、これも今のインドに適切なことです。日本からは経済的支援やインフラ整備、基盤整備の支援もあり、最新の例として、着実に成長しているニューデリーの地下鉄がありますが、ここで議論するにはあまりにも有名です。

第三に、絵画や生け花などのすばらしい日本文化を普及するというタゴールの夢は、ある程度は実現されましたが、その夢の実現には、まだやるべきことが大きく残っています。日本でのインド文化に対する認識や研究は、インドでの日本文化に対する認識と比較すればはるかに進んでいます。このことは、2009年に日印関係をテーマとした展示会で明らかになりました。日本でのインド料理、インド伝統医学アーユルヴェーダ、ヨーガ、バーラタナティヤムなどインド伝統舞踊に関する本は数多く出版されている一方、茶道、生け花、折り紙など日本文化がインドの言語で紹介された本は、嘆かわしいほど少ないのです。

しかし、例外もあります。空手は、インドで人気があり、空手を教える学校もあります。また、インターネットで知りましたが、インドには、現代俳句の愛好者たちの俳句クラブが約300あり、楽しい娯楽となっています。それでもなお、ベンガルのタゴール大学の日本バーヴァン（日本センター）や、コルコタのラビンドラナート・オカクラ・バーヴァン、日本関係機関は、この分野でもっと多くのことをやれるはずです。最近、インドのいくつかの主要都市で、国際交流基金が日本文化を紹介する祭を開催しました。

## ヴィヴェーカーナンダとタゴールのメッセージの普及と実現

さて、スワーミー・ヴィヴェーカーナンダとタゴールが日本の人々のために残した深遠なメッセージをさらに研究し、広め、実現する手段はあるでしょうか。このことを簡単に議論してから、まとめたいと思います。

メッセージには、主に次の６つの分野があります。

1）精神性

2）仏教の復興

3）調和

4）仕事

5）意欲

6）インドと日本の相互関係

## 1）精神性

これを議論するためには、まず近代史において、国家の指導力をふりかえり、現在の日本のシナリオを探る必要があります。日本の近代史の研究からわかることは、日本は、何事もやり方を定め、集団として行動し、もし国民がその重要性を確信し、想定できる目標が持てれば、国家は奇跡をも成し遂げることが可能だ、ということです。最初の目標は、近代化でした。1930年代の次の目標は、軍事大国になることでした。次の目標は、第二次世界大戦での敗戦に代わり、経済大国になることでした。これは数十年にわたって非常によく機能してきました。しかし、1980年代以降は、景気の低迷と絶頂期の回復の兆しがみられず、国民が一団となって奮闘して達成すべき国家としての目標が存在しないようです。したがって、日本は国家として現在、重大な岐路に立っています。

それだけでなく、主に次のようなさまざまな問題が各方面で国民を悩ませています。

・政治的には、指導力が欠け、政権の安定がありません。

・社会的には、家庭崩壊が増加し、心の悩みや自殺が驚くべき速度で上昇しています。

・経済的には、失業と経営者の保身が増加し、GDPは着実に減少しています。

・宗教的には、仏教が人々に精神的な指針を与えることができず、争いばかりです。

・文化的には、伝統文化が魅力と人気を失い、西洋からの安価なものが溢れています。

・法と秩序的には、少年非行も含めあらゆる種類の犯罪が増加しています。

これらすべての問題に加え、常に自然災害の脅威があります。最近では、東日本の自然災害で損傷した原子力発電所による環境災害も発生しています。

これらの問題のいくつかは、近代化のプロセスに由来しながらも、第二次大戦後や近年に始まった問題もあります。

それでも、現在の厳しいシナリオであっても、特に法と秩序と社会倫理に関しては、日本は他の多くの国よりもはるかに良い状態であることは確かです。しかし、これに満足すべきではなく、問題が手に負えないほど大きくなる前に解決すべきであり、またそうすることによって、規範となる国家になるべきです。

このような問題の解決にあたり、タゴールとスワーミージーが強調していた精神性の役割はどのように役立つでしょうか。まずこのために次の二つの点を考えるべきです。

1）まず、日本の最大の資産は何でしょうか。

2）日本の最大の弱みは何でしょうか。

私の意見では、この国が持つ最大の資産は人間です。ごく少数を除き、この国の人々の性格の特性はすばらしく、日本人は、どのような国家にも願ったとおりにその目標を達成させることができるのです。一介の旅人でさえも気付き、理解できる特性があるのです。たとえば、仕事に取り組む献身的な姿勢、目的に対する誠実さ、自制的な行動、我慢強さと忍耐力、公共の道徳的配慮、国家への愛、美学、清潔な習慣、実用主義などです。スワーミージもタゴールも観察していたこれらの資質のいくつかが、昨年の日本の東北を襲った大地震と津波で、歴然と示されました。津波被害の映像が報道されたとき、世界中の人々が、被害者の忍耐と規律に感銘を受けました。

では、最大の弱みは何でしょうか。それも人間なのです。物理的なレベルではなく、心理的なレベルで、すばらしい特性をもった人々であるにもかかわらず、自己認識の危機で苦しんでいます。この自己認識の危機には、3つの側面があります。すなわち、錨（精神的支柱）の欠如、方向性の欠如、そして永遠に対する認識の欠如です。したがって、一般の人々は、精神的な錨や人生の方向性、達成すべき高次元の目標がないままに、世の中のはかない出来事のみ追い求め、現在の生活上を漂っているかのようです。トラブルに巻き込まれたときに安心できるような人生の錨（精神的支柱）がないために、トラブルに直面すると、人はすっかり無力となり、狼狽してしまいます。永遠に対する認識の欠如により、はかない一時的なことだけを追求していると、人は、途方もなく不安になり、何かを失ったり、別離に遭遇したりすると、ショックを受け動揺してしまいます。最終的に、方向性の欠如により、人々は混乱し、自信を失います。このような状況は、架空のものではなく、様々な調査によって明らかにされました。

ヴィヴェーカーナンダによれば、人生の理想的な目標は、個人の生活のあらゆる側面に気づき配慮することです。つまり、身体、心、知性と精神に気づき配慮し、それによって、安定した喜びと知恵の状態を楽しむことです。そして、いったん、永遠なるものを認識することさえできれば、それが人生の錨（精神的支柱）になります。タゴールとヴィヴェーカーナンダによれば、この永遠なるものの認識が精神性の、霊性の核心となるのです。これなしには、たとえ人生において何百ものことを達成したとしても、常に苦しみや無力感に対して弱い人生になるのです。一方、永遠なるものを認識していれば、世俗的な達成がたとえなくとも、充実した喜びと平和と知恵に満たされた人生にできるのです。

それでは、この永遠なるものを認識するために、人は、何か宗教に従ったり、寺院や教会に行ったり、何か宗教団体の会員になる必要があるでしょうか。

ヴィヴェーカーナンダは、こう言うでしょう。「そんなことは全く不要だ！宗教がなくても、寺院に行かなくても、宗教団体に入らなくても、神を信じることさえしなくても、永遠なるものをよく認識することができるし、またそれによって精神的に、霊的になれるのです。ただ、本当の『私』とは何か、を見つけさえすればよいのです。他の言葉でいいかえれば、あなた自身の中にある永遠なるものを、純粋な意識の中にあるものを、探ることです。それができれば、あなたは自分を強さと喜びと知恵の源泉に自分をつなげることができるのです。そしてそれはもともとあなた自身の中にすでに存在しているのです。このようにして人は、最も必要とされる人生の錨（精神的支柱）を見つけ、自信にみちた偉大な存在になるのです。」

しかし、それが難しすぎる場合、マクロレベルで、純粋な意識からの支援を受ける必要があります。つまり哲学者が究極の真理と呼ぶもの、信者が神と呼ぶ存在や、ブッダや、イエス・キリスト、ラーマクリシュナなどのようにすでに純粋なる意識、つまり永遠なるものと自分をつなげている予言者からの助けを受けることです。

日本人が宗教的か否かについては、国内外の学者による多くの研究がありますが、私が思うに、より重要なことは、より霊的、精神的であるかどうか、です。霊性とは、さきほどの説明のように、人生における最も大きな死活問題であり、これは宗教的な民族だという他国の人たちにも同じようにあてはまることであり、またこのことがスワーミージやタゴールのアドバイスなのです。

## 2）仏教の復興

東京財団の理事長および慶応義塾大学教授の加藤秀樹氏は、日本における仏教の最近の状態を深く憂慮して、2008年にサウジアラビアのリヤドで開催された、「日本とイスラム世界間の文明の対話に関する会議」の演説の中で、日本の仏教が現代社会において生き残るとするならば、早急に現代文明に追いつく必要があると、発言しています。実際、かつての日本の仏教寺院の崇高な雰囲気をどうすればよみがえらせることができるか、心の平安と精神的な恩恵を得るために、非常に多くの数があるお寺を訪れることがどんなに興味深いことか、そのような雰囲気をよみがえらせることができるか、こういった課題に、仏教の指導者たちは取り組む必要があります。大衆の目に映る仏教の僧侶とその組織のイメージは、どのようにすれば改善できるか、ただ単に葬儀を行うだけでなく、僧侶は、信者が何よりも必要としている精神的な指導を与える仕事に、どうすれば再び就くことができるか、ブッダの教えを色あせさせずに、現代人に受け入れやすい方法で伝えられるか、といったことにも、取り組む必要があるでしょう。

仏教の復興について、私はヴィヴェーカーナンダと彼の師、ラーマクリシュナに関する研究は、間違いなく役に立つと思います。なぜなら、二人とも現代に生まれ、現代特有の社会環境や問題、そして古くから伝わる霊的な真理を現代人に伝える必要性を認識していたからです。現代人には受け入れやすく、多くの道を求める人々にとっては非常に効果的なことが証明されている方法で伝える必要がありました。二人の教えの価値とその伝え方は、今の時代を背景にした特徴的なもので、ヒンドゥ教徒だけでなく、非ヒンドゥ教徒や僧侶にも有益と思われてきましたし、ハーバード大学神学部教授 クルーニー牧師のような、宗教を研究する学者によっても、高く評価されてきました。

ラーマクリシュナ/ヴィヴェーカーナンダの教えとその伝え方の特徴を幾つか例に挙げると、セクト主義ではなく、普遍性、自由主義、合理性、深遠でありながら明快、現代人の日常生活に関連している、等です。その上、ヴィヴェーカーナンダは、可能な限り、現代人が真価を認め、より説得力があると思っている、最新の科学、社会科学、哲学の観点から自らの教えを結びつけ、説明し、解釈しました。宗教を紹介する際に、仏教の指導者はこれと同じアプローチを取ることが可能です。

## 3）調和

調和と普遍性についてのメッセージは、タゴールとスワーミージの仕事の最も重要で雄弁に進化した２つの側面です。例えば、タゴールによって設立された機関のモットーは、「Yatra Viswa Bhavati Ekanidam」で、「全世界が出会う場所」を意味しています。

調和の預言者、あるいは「信仰の数だけ道がある」という名言の創作者とみなされている、恩師シュリー・ラーマクリシュナによって生気を与えられたヴィヴェーカーナンダは、調和についてのメッセージをインドと西洋の両方で説きました。シカゴで開催された第一回世界宗教会議での歴史上重要な調和についての演説は、数世紀も経っているにもかかわらず、今現在にも当てはまるため、日本の安部首相や米国のオバマ大統領など世界のリーダーたちが自らのスピーチの中でそれを引用しています。

調和の概念は、宗教だけに限定されるものではなく、家族や社会および国家間の取引にまで拡大されるべきものです。　しかし、今日の必須の必要性が迫られている宗教の調和とは、他の宗教の研究と、カルトではない他の宗教の容認も、霊的な光の純粋な道なのです。これらの両方において、日本はまだ長い道のりを歩まねばなりません。仏教の多くの様々な宗派の間に善意が不足しているように見えるからです。また、他の宗教に関する　基礎的な知識も欠如していると言えるでしょう。　仏教が生まれた母体であるヒンドゥ教でさえ、あまり知られていないのです。

この宗教の調和を促進する上で、異教間のフォーラム（公開討論）が、大きな役割を果たすでしょう。そのようなフォーラムは、米国、南アフリカ、オーストラリアなどの国々では盛んで、異なる宗教の指導者が定期的に集まり、研究や討議を通して他の宗教に慣れ親しみ、共通の問題について意見交換ができる場を提供しています。各宗教の信者たちに善意の　メッセージを送ることで、宗教間の調和を築くには、　大いに役立つでしょう。能力に限界があるとはいえ、私もここでそのようなフォーラムを試み、失敗しました。誰かが近い将来に日本でこれを実現して下さることを熱烈に私は祈っております。

## 4）仕事

日本人の仕事への献身と完璧を目指しての努力が、無比の製品を作り、世界市場を引きつけていることは、よく知られています。しかしながら、仕事に集中している人たちを注意深く観察すると、過酷な仕事のプレッシャーからくるもの凄いストレスと緊張は、人間関係だけではなく、体と心の健康にひびいていることが分かります。

それゆえに、誰もが真剣に知りたがっているのは、放棄することのできない義務を遂行している間も、ストレスを感じることなく、健康と心の平安を満喫し、その気になりさえすれば、霊的になることさえ可能な状態に、どうしたらなれるかということです。このために、スワーミー・ヴィヴェーカーナンダの「カルマ・ヨーガ」が大変役立ちます。

有名なマイクロソフト社の共同創業者 ビル・ゲイツは、近年コルコタを訪れていた間に、メディアの前で、彼はスワーミー・ヴィヴェーカーナンダのカルマ・ヨーガを読んで深い感銘を受け、それがきっかけで偉大なスワーミーが属していたカルカッタ（コルコタ）に関心をもつようになったと打ち明けたことが報じられています。

## 5）意欲

最近米国で行なわれた調査で、卒業生や会社の新入社員たちは、失敗、フラストレーション、別離、喪失、病気、あるいは死といった形で遭遇した人生の苦難や危機に、どのように直面したら良いかということについて、家庭または学校でなんらかの教育または訓練を受けてきたかという質問を受けました。これらの若者たちの大多数は、そのような訓練は全く受けたことがない、またはほんの少ししか受けていないと回答しました。

このことは日本にも当てはまります。深刻な問題に直面して若い少年や少女、大人でさえも途方もなく苦しんでいる時、私たちは動揺します。特に、神や預言者への信仰がなく、支援を求めて右往左往しても、ほとんどの場合得ることができず、ついには自分たちの命を終わらせることを考えているのです。その人たちの親や社会の指導者たちがこの状態をなすすべもなく見ていてよいものでしょうか。事前に彼らにポジティブな考えや元気づけるメッセージを与えることによって、若者たちに人生の困難に勇敢に立ち向かう方法を身に付けさせるべきではないでしょうか。

私は、「インスピレーション」について書かれた日本語の本は相当数あることを知っていますが、これらの本がどの程度役立っているかは知りません。しかしながら、これらのメッセージに加えて、タゴールや特にヴィヴェーカーナンダの心にひびくメッセージの幾つかを覚え、それらに従うことは、本当に助けになるでしょう。ヴィヴェーカーナンダのメッセージは、魂にとっては（飲めば不死となる）霊薬、否定的で弱い心にとっては活力を与える強壮剤のようなものです。覚えておられるかもしれませんが、スワーミージーの誕生日を国民の祝日とし「青年の日」とインド政府が宣言した主な理由のひとつは、スワーミージーのメッセージにはあらゆる人々、特に若者を理想的な生活を送る気にさせる、巨大な強さがあると、政府が感じたからです。皆様方により良く理解して頂くために、ここにスワーミージーの言葉の幾つかを取り上げます。

・全ての強さはあなたの中にある。それを現しなさい！

・強さは生、弱さは死。

・弱さの治療法は、悩むことではなく、力強さを思うこと。

・非利己的であることは神である。

## 6）インドと日本の相互関係

ここ数年、インドと日本の相互関係は、インドが外国に市場を開放したことと、インドのIT産業が台頭しつつあることを受けて、特に経済部門で進展しています。その他の技術移転および製品、または最近の日印包括的経済連携協定が、この関係をいっそう強化しています。外交面でも、経済面でも、この日印関係は、時折妨げられることはあるものの、文化交流によってこそ継続していくことができるのです。外交面では、1988年のインドが核実験を行なった時に関係が冷え込みました。インド文化の真価を認め、より深く理解するには、インド文化の基盤であり、まさしく土台である、インドの精神的伝統について理解することが必要です。個人であれ、国家であれ、人生のすべての局面において、普遍性と調和のある精神性・霊性、神を重んじることが「インド人らしさ」であり、これこそがインド人の特性です。この「インド人らしさ」を理解するために、タゴールとヴィヴェーカーナンダの二人が、大変役に立つでしょう。

終わりに、インド人との取引や交渉が必要な企業幹部や官僚の皆様方に、自分の使命を果たせるよう、大胆不敵にも、私から助言をさせていただきます。それは、インドの宗教と哲学や、ガンディー、ヴィヴェーカーナンダ、タゴールなどの偉人について読み、それを、インド人の取引相手や交渉相手に話してみることです。その効果には目を見張ることでしょう。まれに例外はありますが、企業幹部はもとより、インド人は概して、インドの宗教、哲学、特に偉大な同胞について語るのが、大好きだからです。

## 結論

この国が直面する深刻な問題に取り組む上で、ヴィヴェーカーナンダとタゴールを学ぶことがいかに役立つかについて議論してきましたが、宗教家であるから不適切だとして、ヴィヴェーカーナンダを切り捨てるとか、神秘的な詩人だから理解できないなどといって、タゴールを拒否するのは、愚の骨頂です。この二人は、個人と国家の両方に対して核心を突いたメッセージを持っています。　このことは、インド人に対して真実であるばかりでなく、日本など他の国々の人々に対してもまた真実なのです。これは、アメリカの有名なスミソニアン大学が、アメリカの文化と成長に著しく貢献した、米国人　以外の31人を特集した展示会を開催した際、スワーミー・ヴィヴェーカーナンダがその中に含まれている、という報告で立証されています。

もうひとつの日本人の特性は、あるアイデアが良い、あるいは有益であると気付くと、その由来に関係なく、単に論議したり夢みたりするのではなく、それを適合させ、導入します。ひとたびタゴールやスワーミージの考えが日本人と日本国に極めて有益であると確信すれば、次はその導入を考えるでしょう。それには二人についての認識を一段と深める必要があります。

これについて私には次のような提案があります。

・第一は、講演や文化活動など定期的に行なわれるプログラムの継続に併せて、新たにタゴールとヴィヴェーカーナンダの合同または個別の展覧会を日本中の特に教育機関で開催するのです。二人についての認識をさらに深めるためです。私の認識では、芸術作品を紹介する催しが数回開催された以外には、タゴールに関する本格的な展覧会はまだ開かれたことはありません。しかし、私たちのヴェーダーンタ協会は、前述のように、スワーミージに関するささやかな展示会を数か所で催し、好評を博しました。

・第二は、日本においては、知識やアイデアを与えるのに漫画本が非常に一般的で、人気のある手段であり、ガンディーに関する漫画はすでに数冊出版されています。タゴールとヴィヴェーカーナンダについての漫画シリーズも出版されるべきでしょう。

・第三は、インドの文化紹介と、インドの三大偉人である、ガンディー、スワーミージ、タゴールの伝記と彼らのメッセージを収めた中型本の出版です。公立図書館と教育機関の図書館にもおくべきです。さらによいのは、これらの本のいずれかを、学校の授業課目に組み入れることです。前述したこととは異なる方法で、インド文化への知識を深め、結果的に学生を育てることになるでしょう。

国際交流基金や文部科学省、インド大使館と共に、これらの出版に取り組み、広範囲の読者に届けることも可能でしょう。非現実的ではないにせよ、この提案が野心的と呼ばれるのを覚悟の上で断言します。これらの本を学生や一般大衆に紹介することは、日印関係のさらに強化に大きく役立つばかりでなく、さきほどお話した日本を苦しめている深刻な欠落の穴埋めに貢献すると確信しています。

同じように、インド人は、称賛に値する日本人の特性を身につけるように健闘すべきです。つまり、義務に対する遂行、規律正しさ、団結すること、他人との取引や交渉で正直であるべきなど、一般社会における社会倫理の尊重などです。

このようにあらゆる部門で協力し合うことによって、私たち両国の国民は、二カ国間によりよい絆を築くというスワーミージ、タゴール、岡倉天心の長年の夢を実現することができるでしょう。これこそが、日印関係における三人の偉大なパイオニアたちの神聖な思い出を称える最もふさわしい賛辞となるでしょう。

この比較的長いスピーチに耳を傾けて下さいました皆様に、心から御礼申し上げます。